札幌国際大学奨励研究（平成 26～28 年度）

# 音楽交流による地域づくり～美唄市における試み～
# 最終報告書

平成29年3月31日

## はじめに

本研究は、〈新型アウトリーチ〉という考え方の下、美唄サテライト・キャンパス運営協議会との協働事業の展開を通じて、音楽交流による地域づくりの新たなモデルの構築に取り組んだ実践研究である。その要となる〈新型アウトリーチ〉という考え方は、1990 年代の後半以降、芸術家を教育や福祉施設に派遣してワークショップなどの事業を行う活動の総称として定着してきたこれまでのアウトリーチの代わる考え方である。これまでのアウトリーチは、普段、芸術に触れることが少ない地域や住民に対して、体験の機会を提供することで芸術の普及や地域の文化施設の役割を拡大させてきた。しかし、官製興行化、エビデンス測定の不足、他の政策領域との関連付けの不足、人材を招くコストの増大等が課題として指摘されており（財団法人地域創造　『文化・芸術による地域政策に関する調査研究報告書』2010 年）、これらの課題を抜本的に解決するためには、〈従来型アウトリーチ〉に代わる新たな発想が必要であると考えた。

そこで本研究では、これまでのアウトリーチの課題を解消するための新たな発想として、〈新型アウトリーチ〉という考え方を提唱している。この考え方は、プロではないが高度な芸術性をもった人々を活用することによって、官製興行化する音楽演奏や人材招聘のコストの拡大、地域づくりとの関連不足などの課題を解決していくための仕組みの基礎をなす考え方である。

この考え方に基づき、本研究では、札幌国際大学シアターオーケストラの学生、札幌交響楽団定年退職者、地元のハイパー・アマチュア（後述）らを有機的に関連づけ、①キャンプ（演奏者間の宿泊型技術交流）、②デリバリー（出前演奏会）、③ワークショップ（参加型演奏会）等の活動を実施し、これまでのアウトリーチが抱えてきた問題を解決していくという試みを実践してきた。

研究は 3 カ年計画で実施し、 1 年目の平成 26 年度には、キャンプ（演奏者の宿泊型技術交流）や美唄市内の保育所や幼稚園でのデリバリー（出前演奏会）、市内の中高生や大人によるワークショップ（参加型演奏会）に取り組んだ。2 年目の平成 27 年度は、平成 26 年度に引き続き、未就学児童（市内保育所・幼稚園）を対象に、デリバリー（出前演奏会）とワークショップ（参加型演奏会）の展開した。これにより、美唄市内の全ての保育所と幼稚園でのデリバリー（出前演奏会）の実施が完了した。さらに、3 年目の平成 28 年度は、美唄市内の高齢者施設や知的障がい者授産施設などでもデリバリー（出前演奏会）をおこない、参加型演奏会は、美唄市内の小中高生と大人が一同に介した単独の合同演奏会を実施するまでに至った。

本研究は、美唄市との連携協力の下で展開されたこれらの取り組みを基に、〈新型アウトリーチ〉という考え方の有効性を実践を通して検証し、地域づくりに活用していくという試みである。

# 第1章　研究の構想

## 第１節　全国的に展開されるようになったアウトリーチの現状と課題

一般財団法人地域創造は、平成22年3月に『新・アウトリーチのすすめ～文化・芸術が地域に活力をもたらすために～』という報告書をまとめている。この報告書は、本財団が、平成10年度から継続してきた公立ホールや学校などへのアウトリーチとコンサート〈音楽活性化事業（おんかつ）〉の事業成果を踏まえ、単にアーティストを派遣するという形式的なものに留まっているアウトリーチを、教育や福祉などの幅広い行政分野と連携することで、新たな可能性を検討することを目的に書かれている。

本報告書では、独自に実施した調査[1]に基づき、アウトリーチの現状と課題について、次のように指摘している。

### (1)現状

1990年代の後半以降、芸術家を教育や福祉施設に派遣してワークショップなどの事業を行うこれまでのアウトリーチは、普段、芸術に触れることが少ない地域や住民に対して体験の機会を提供することで、芸術の普及や地域の文化施設の役割を拡大させてきた。

### (2)課題

ア：官製興行化：〈民〉の事業を〈官〉が肩代わりしている例が散見される。
イ：エビデンス（効果）測定不足：効果測定が不十分で演奏会等が単なる興行で終わっている。
ウ：他の政策領域との関連不足：実施することのみが目的として語られてきた。
エ：人材を招くコストの増大：プロの演奏家の場合、謝礼や交通費等のコスト負担が大きい。

このような調査結果を踏まえ、本報告書では、新たなアウトリーチの方向性として、次の4つを提言している。

①劇場・ホール内での鑑賞・体験サポート
②派遣型アウトリーチ（単発・集中型）
③派遣型アウトリーチ（継続・長期型）
④連携・協働型アウトリーチ

1　2008年～2009年度にかけて実施。当財団の事業でアーティストを派遣した学校や福祉施設で教員や児童にアンケートを実施し、アウトリーチの効果を定量的に把握したもの。

さらに、このような分類を基に、アウトリーチの活動の目的を明確化し、幅広い関係者と連携し、長期的な展望と振り返りをすることの重要性を指摘している。つまり、公立ホールが単体で実施するのではなく、文化部局以外の行政部局や市民、大学といった官民の垣根を超えた連携・協働により、まちづくりとして政策の一部を担うまでにその価値を高めていこうとするねらいが本報告書には込められていると言えよう。

## 第2節　美唄市におけるハイパー･アマチュアを活用した〈新型アウトリーチ〉の実践構想

本報告書で述べられているアウトリーチの4つの方向性は、あくまでも方向性であり、これらに基づく具体的な取り組みについては、地域の実態を考慮した様々な展開例が想定される。そこで、本研究では、一般財団法人地域創造の先行研究を踏まえ、新たなアウトリーチの姿を実践的に研究するためのフィールドが必要であると考え、本学と連携協定を調印している美唄市を選定した。美唄市を実践フィールドとして選定した理由は、次の三つである。

①美唄サテライト・キャンパス運営協議会という組織があり、教育や福祉などの幅広い行政分野との横断的な連携が期待できること

②公立ホール（美唄市民会館）での既存の音楽的事業があり、その発展が期待できること

③学校関係者や一般市民の協働による新たな音楽活動に取り組むための核となる団体や人材が確保できること

以上、三つの理由から、本研究では美唄市との協働事業の中で、新しいアウトリーチの型の具体例を〈新型アウトリーチ〉として提言することを構想した。

### (1)〈新型アウトリーチ〉の定義

本研究で構想では、〈新型アウトリーチ〉の条件として、次の五つ掲げることとした。

【ア】地域外の人材（札響OBやセミプロ等、本学学生）による様々な活動がいわば〈触媒〉となって、地域住民の芸術文化活動を活性化させる。

【イ】美唄市のハイパー・アマチュア（後述）と一般住民を繋ぐことで、その地域で中心となって活躍するイニシエーター（地域を活性化させる人材）を育成する。

【ウ】実施後の効果測定の項目や方法が予め設定されており、エビデンスの明確化の仕組みがある。

【エ】提供だけでなく、提供を通してまちづくりの何に寄与できるかが具体的に想定されている。

【オ】コスト削減とハイパー・アマチュアの演奏機会の増大の二つの課題を一気に解消する場を設定する。

### (2)〈新型アウトリーチ〉で重要な〈ハイパー・アマチュア〉という考え方

〈ハイパー・アマチュア〉とは、本研究における造語である。プロと一般住民の間に位置する、プロではないが高度な芸術性をもった市民を意味する。これらの人々は、活動することそのものに喜びを感じ、発表する場を必要としているが、活動することを生業とはしていない点が重要である。これらの人々を活用することで、謝礼や交通費などのコスト面での負担軽減や、生涯学習の発表機会の提供、人々の交流人口を促進することによる、地域の活性化などのメリットが期待できる。

## 第 3 節　研究の基本計画(3年計画)

### (1)平成 26 年度:ワークショップ型演奏会及び体験型演奏会の社会実験モデル化

札幌国際大学シアターオーケストラの学生、札幌交響楽団定年退職者、地元のハイパー・アマチュア（美唄市民吹奏楽団員）を核としたウインド・オーケストラを組織し、①ワークショップ型演奏会（前述条件：ア、イ、ウ、エ、オ）、②体験型演奏会（前述条件：ア、ウ、エ、オ）を実施した。エビデンスの明確化のために、期待される効果について想定し、その都度参加者（演奏者、聴衆）にアンケート調査を実施すると共に、一定期間経過後に追跡調査を実施し、音楽による新型アウトリーチによる地域づくりの有効性について検証することとした。

### (2)平成 27 年度:市内の保育所と幼稚園での体験型演奏会の実施によるデータ抽出

前年度の実施内容のうち、美唄市内の保育所と幼稚園を全て訪問することにより、エビデンス測定の基盤を整備することを想定した。さらに、「エ：提供を通してまちづくりの何に寄与できるかが具体的に想定されている。」を念頭に置き、保育所と幼稚園の教職員に対する意識調査を実施し、エビデンスの明確化の仕組みづくりに資するデータを抽出することとした。

### (3)平成 28 年度:音楽をする人や音楽そのものが触媒となるまちづくりのモデルの構築

音楽を演奏すること、音楽を聴くこと、そして音楽と共にする様々な活動が、地域づくりとどのような関係にあるのかをモデル化し、意識調査によるエビデンスを測定することとした。また、音楽が人を育てるという側面を検証し、〈新型アウトリーチ〉による地域づくりの有効性を明確化することとした。

# 第２章　平成26年度の研究実績

## 第1節　ワークショップ型演奏会及び体験型演奏会の社会実験

### (1)ワークショップ型演奏会の取り組み:美唄市民音楽祭へ向けたワークショップと合同演奏

【ワークショップ】

日　　時：平成 26 年 11 月 8 日（土）13 時 00 分～15 時 00 分

場　　所：東中学校

主　　催：美唄サテライト・キャンパス運営協議会

札幌国際大学短期大学部（担当：河本洋一　教授）

内　　容：札幌交響楽団（首席奏者）ＯＢの真弓先生や、美唄市民吹奏楽団指揮者の石井先生、美唄中学校の橋本先生のほか、河本教授が率いる札幌国際大学シアターオーケストラの学生、美唄市民吹奏楽団のパートリーダーを中心に演奏指導を交え、演奏練習をおこなった。

効　　果：各団体とも初顔合わせにも関わらず、楽器演奏を通じて参加団体間の交流が深まり、合わせて各パートに分かれての演奏指導により、技術の向上も図られた。

参加者数：77 名　札幌国際大学シアターオーケストラの学生 7 名・河本教授・札幌交響楽団ＯＢ（元トロンボーン首席奏者　真弓基教氏）1 名、美唄市民吹奏楽団 19 名、美唄聖華高校吹奏楽部 10 名、美唄中学校吹奏楽部 19 名、東中学校吹奏楽部 20 名

札幌交響楽団 OB の真弓先生による呼吸法の指導

札幌交響楽団ＯＢの真弓先生によるグループレッスン

札幌国際大学の学生によるアドバイス

美唄市民吹奏楽団の石井先生による指導による指導

【合同演奏】

美唄市民文化祭・音楽祭で『美唄サテライト・キャンパスｗｉｔｈ札幌国際大学

◇日　　時　平成 26 年 11 月 9 日（日）9 時 30 分～16 時 40 分

◇時　　間　13 時 00 分～16 時 40 分（音楽祭）、16 時 15 分～16 時 40 分（出演時間）

◇場　　所　美唄市民会館「大ホール」

◇主　　催　美唄サテライト・キャンパス運営協議会

　　札幌国際大学短期大学部　河本洋一　教授

◇内　　容

『美唄市民文化祭・音楽祭』（最終演者）に『美唄サテライト・キャンパスｗｉｔｈ札幌国際大学』として出演。札幌国際大学シアターオーケストラの学生、河本教授、札幌交響楽団ＯＢの真弓先生、美唄市民吹奏楽団、美唄聖華高校吹奏楽部、美唄中学校吹奏楽部、東中学校吹奏楽部の総勢７７名により、「７６本のトロンボーン」「サンバベアー」「アフリカンシンフォニー」を演奏した。

【リハーサルと本番での合奏練習の様子】

◇効　果

本番当日の全体リハーサルで、初めての合同練習をおこなったが、前日の各パート練習も含め、楽器演奏を通じて参加団体間の交流や世代間の交流が深まるとともに、普段は行うことのない大人数での合同演奏により、吹奏楽の魅力を高めることができた。また、『美唄市民文化祭・音楽祭』に出演することにより、同音楽祭を盛大に盛り上げる内容の濃い出演で、市民等に音楽の魅力をより一層高めることができた。また、本学の学生にとっては、自分たちが主役ではなく「触媒」となって地域の音楽活動の活性化に貢献するという役割を体験したことは、社会に貢献する人材育成という観点から、極めて有益な教育効果をもたらした。

【出演者数】総勢 77 名　内訳：札幌国際大学シアターオーケストラの学生 7 名・河本教授・札幌交響楽団ＯＢ 1 名、美唄市民吹奏楽団 19 名、美唄聖華高校吹奏楽部 10 名、美唄中学校吹奏楽部 19 名、東中学校吹奏楽部 20 名

来場者数：240 名

(2)体験演奏会の取り組み:ふれあいコンサート

◇日時・場所

1日目　平成27年3月9日（月）　①アカシア幼稚園　10:00開演（45分間）

②美唄市児童館　15:00開演（1時間）

2日目　平成27年3月10日（火）③栄幼稚園　12:30開演（45分間）

◇主　催

美唄サテライト・キャンパス運営協議会

札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科（河本洋一 教授・学生9名）

◇内　容

札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科の学生による人気アニメソングや幼稚園等よく歌われている歌の音楽演奏と、簡単な楽器を使った子どもたちとの演奏を行う親子参加型のふれあいコンサートを開催する。

＜曲目＞

【①アカシア幼稚園】

1　春が来た（歌）　2　思い出のアルバム　3　おもちゃのチャチャチャ

4　演奏楽器の紹介　5　山の音楽家　6　Let it go

7　ようかい体操第一　8さんぽ

園児の前で子どもの歌の演奏する学生

演奏楽器の紹介。『バリトンサックス』について説明する学生

演奏楽器の紹介。『バリトンサックス』について説明する学生

【②美唄市児童館／③栄幼稚園】

1　春が来た（歌）　2　思い出のアルバム　3　さんぽ

4　演奏楽器の紹介　5　山の音楽家　6　おもちゃのチャチャチャ

7　Let it go　8　ようかい体操第一

◇効　果

園児や小学校低学年の児童に対し、本物の楽器を使った芸術鑑賞等の機会を創出することにより、音楽を愛する心を育て、豊かな情操を養う一助にすることができた。また、幼児教育を履修する学生たちに対し、卒業後の進路を視野に入れた生きた教育の場を提供することができた。また、本学の学生にとっても実習以外で子どもとふれあい、自らが役立つ体験を得る機会となり、導入教育としての可能性が示唆された。

◇参加者数（演奏者含む）

| | | |
|---|---|---|
| ①アカシア幼稚園 | 園児・保護者等 | 約 110 名 |
| ②美唄市児童館 | 児童等 | 約 50 名 |
| ③栄幼稚園 | 園児・保護者等 | 約 60 名 |

◇市長への表敬訪問

日時　平成 27 年 3 月 10 日（火）　10 時 30 分～10 時 50 分

場所　美唄市役所 2 階「市長応接室」

## 第2節　平成26年度の取組の考察

美唄市との連携協定の中で実施された様々な事業は、本学にとっては地域貢献の一環として、美唄市としては、まちづくりの一環として二つの枠組みの中で一つの事業を実施している、いわば「融合事業」である。

「融合事業」とは、どちらか一方の事業に他者が連携・協力するという考え方ではなく、両者にとって利益があり、かつ両者が協働して取り組めるという状態を意味する。いわば互恵関係が成立している事業が、美唄サテライト・キャンパス協働事業と特別教育プロジェクト推進経費による「音楽交流」である。

これらの事業が本学と美唄市にとって互恵関係を築きながら発展していくためには、以下の点が今後の課題となった。

### (1)経費負担の情報共有と見通しを持った互恵関係の確立

「音楽交流」は、美唄市と本学がそれぞれ予算を有し、その予算を互いに出し合う中で一つの事業が形成されている。しかしながら、平成 26 年度は経費の殆どを本学が負担しており、この経費が確保できなくなった場合は、現状の取り組みは不可能となることが懸念された。

したがって、美唄市と本学の両者にとって、経費負担の情報を共有することはもとより、このような事業展開をどのような目標で継続あるいは終了していくのかといった計画性のある展開が必要となった。

### (2)効果測定の方法及び効果のエビデンスの明確化

美唄市は税金、本学も私学助成という公的資金で実施されているという性格上、美唄市民や学生にとってどのような効果があるか、また、その効果測定の方法やエビデンスは、市民や学生だけではなく、広く社会全体に発信されなければならないと考えられる。現在は、この点に関しては、ほぼ美唄市の担当者に依存しているというのが実状であるため、大学側としても研究教育機関としての地域貢献のポリシーを明確にし、適切な方法で効果測定及びその広報に務めていくことが必要となった。

### (3)事業内容の教育課程への位置づけの検討

「音楽交流」は、多くの学生の参加があって成立している。これらの学生は、現在はサークル活動の一環として関わっているが、学生にとって自分たちが地域の担い手となり、地域を活性化するというフィールドワークとしても位置付けられる可能性がある。そして、「音楽交流」の事業に同行した美唄市の職員は、指導する教員と共に外部講師としての機能も果たしており、PBL (project based learning) 型のフィールドワークとしての位置付けも示唆された。

継続的な事業展開と双方のメリットを考えると、教育課程への位置付けは組織的な取組として位置づけるための工夫となり得る。

# 第3章　平成 27 年度の研究実績

## 第1節　体験型演奏会とワークショップ型演奏会の定型化

### (1)体験型演奏会「ふれあいコンサート」の実施

美唄市内の保育所と幼稚園を対象にした演奏会を想定した。本学シアターオーケストラの学生が企画運営し、学生が触媒となり、子どもたちの音楽活動を活性化させると共に、エビデンス測定のための基盤の整備を目的として計画された。また、実施先の教職員の皆様の声を聴取し、本格的なエビデンス測定のための基礎資料を収集することを目指した。

### (2)ワークショップ型演奏会「美唄市民音楽祭」での合同演奏の実施

前年度に引き続き、平成 27 年度も市民音楽祭におけるワークショップ及び演奏会を計画した。ワークショップについては、地元のハイパー・アマチュアによる指導をコーディネートし、演奏会の指揮を地元の音楽家に委ねるような仕組みを作り、本学の学生が触媒となって地域の音楽文化や人材活用の活性化を図ることを目指した。

### (3)美唄サテライト･キャンパス成果発表会における意見聴取の実施

美唄サテライト・キャンパス運営協議会の主催による、成果報告会に参加し、サテライト・キャンパス推進事業の一つである本研究の活動成果の発表を行い、参加者から広く意見を聴取することを目指した。

## 第2節　取組の実施日程

（１）体験型演奏会「ふれあいコンサート」

◇平成 27 年 8 月 10 日（月）

10：15～11：15　進徳保育園

15：15～16：15　茶志内双葉保育園

20：00～20：30　温泉宿泊施設　美唄ゆ～りん館

◇平成 27 年 8 月 11 日（火）

11：15～12：15　峰延保育所

15：00～16：00　アルテピアッツア美唄アートスペース

（２）ワークショップ型演奏会「美唄市民音楽祭」

◇平成27年11月７日（土）・８日（日）

美唄市立中央小学校（ワークショップ）、美唄市民会館大ホール（演奏会）

（３）成果発表及び意見聴取

◇平成28年1月23日（土）15：00～17：00

美唄市民会館大会議室

## 第3節　各取り組みの内容

### (1)体験型演奏会「ふれあいコンサート」

◇目的

これまでの従来型（派遣型・提案型）アウトリーチの音楽交流ではなく、官製興行化、効果測定不足、まちの政策との関連不足、コスト増大の４つの課題解決が見込まれる〈新型アウトリーチ〉を構築する。体験型演奏会「ふれあいコンサート」では、幼稚園・保育所等に音楽鑑賞などの芸術鑑賞の機会を創出することと、幼児教育を学ぶ学生の活動の場を確保することを目的に、札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科が中心となって、〈新型アウトリーチ〉の具体的な活動を企画する。

◇主催

札幌国際大学短期大学部、美唄市サテライト・キャンパス運営協議会

◇日時

【第1期】1泊2日

平成27年8月10日（月）

10：15～11：15　進徳保育園

15：15～16：15　茶志内双葉保育園

20：00～20：30　温泉宿泊施設　美唄ゆ～りん館

平成27年8月11日（火）

11：15～12：15　峰延保育所

15：00～16：00　アルテピアッツア美唄アートスペース

【第2期】2泊3日

平成28年2月15日（月）

10:30～11:10　認定こども園ひまわり

15:40～16:10　中央保育所

20:00～20:30　ゆ～りん館

平成28年2月16日（火）

10:30～11:10　めぐみ幼稚園

15:40～16:10　西保育所

20:00～20:30　ゆ～りん館

平成28年2月17日（水）

10:30～11:10　東保育所

◇概要

札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科の学生を中心とするSIUシアターオーケストラのメンバー（10名程度）による人気アニメソングや幼稚園・保育所などでよく歌われている歌の演奏と、簡単な楽器を使った子どもたちとの演奏、楽器遊びなどを行うことを通じて、音・音楽によるコミュニケーションを図り、音楽活動の楽しいエピソードを形成する。

◇演奏曲

さんぽ、おもちゃのチャチャチャ、うみ、ミックスジュース、アイスクリーム、山の音楽家、おばけなんてないさ、しゃぼんだま

◇備考

アルテピアッツア美唄アートスペースは公開演奏とし、美唄市広報紙「メロディ」及び美唄市ホームページやサテライト・キャンパスのフェイスブックにて周知する。

①進徳保育園

本園は美唄市内の保育所統廃合に伴い、平成27年度をもって閉園する。子どもの人数は20名足らずの小規模保育施設である。演奏会場となった遊戯室は演奏する学生が収まりきらないほどの小さなステージで、子どもたちとの音楽交流を実施した。

◇当日の行程

8:25～ 9:00　札幌から美唄へ移動　スーパーカムイ５号

9:00～ 9:15　JR 美唄駅から美唄市借り上げバスで進徳保育園へ移動

9:15～10:15　会場準備

10:15～11:00　ふれあいコンサート

11:00～11:15　後片付け

11:15～11:40　昼食会場「しらかば茶屋」へ移動

◇ふれあいコンサートの様子

平成 27 年度の研究経費の増額により、学生が使用する楽器の移動は軽貨物車に外部委託することとなった。したがって、学生は楽器を持たずに身ひとつでの移動が可能となったため、朝早くからの演奏が可能となった。

進徳保育園では、日頃から中学生のインターンシップによる訪問や、小編成の訪問演奏などを体験しており、外部からの訪問者に対しては比較的慣れた様子ではあった。しかしながら、初めは学生の問いかけに対する反応に躊躇する場面もあり、このことを想定していた幼児教育保育学科の学生が、アイスブレイク的な導入を図り、スムーズな展開を可能とした。

演奏曲はどれも子どもたちに馴染み深いものばかりで、歌ったり、身体を動かしたり、時にはペープサートにじっくりと見入りながら音楽だけが流れていくといった様々なかたちでの音楽とのふれあいが行われた。

また、保育園の先生たちは子どもに対して一方的な指示を与えることなく、子どもたちの興味関心を学生の司会者へと向けさせ、それを受けた司会者が子どもと対話していく形でコンサートが展開された。

②茶志内双葉保育園

本園は前述の進徳保育園よりもさらに小規模の保育所で、市内中心部の子どもたちよりも生演奏の音楽に触れる機会が少ない環境下にある。ただ、茶志内小学校と至近距離の立地にあるため、日頃から年長者との交流も多い。

◇当日の行程

12:40～12:50　茶志内小学校へ移動

※茶志内双葉保育園が午睡時間のため、音出し準備を小学校で実施。

12:50～14:55　茶志内小学校で音出し

14:55～15:15　移動

15:15～16:00　ふれあいコンサート

16:00～16:15　後片付け

16:15～16:40　宿泊先（ゆ～りん館）へ移動

◇ふれあいコンサートの様子

前述の進徳保育園よりも小規模ながらも、演奏に対する反応は決して小さくなかった。また、子どもたちと共に、保育士の先生たちが一緒に声を出して歌ったり、一緒に身体を動かしたりする場面が見られた。このことは、演奏者側のアプローチだけではなく、子どもたちと共に鑑賞する身の回りの大人（保育士、幼稚園教諭、保護者など）の反応の重要性を示唆しており、今後のふれあいコンサートの展開において、重要なポイントを投げかけていると考えられる。

また、本園ではステージ設備がなかったため、同じフロアを共有しての展開となった。このことは二つの点において重要性をもっていると考えられる。１つめは、演奏者と子どもたちとの距離を縮め、移動をスムーズにすることができることである。これにより、演奏者が演奏しながら子どもたちの近くへ寄っていくことをよりスムーズに実現することが可能となる。２つめは、子どもたちが無理に上を向かなくても演奏者が見えるという点である。小学校などの学校教育施設では、体育館にステージが設置されていることが多く、どうしても目線が上に向きがちである。同じ高さの場合は、比較的目線が真横を向きやすく、子どもたちも安定した姿勢で鑑賞できる。

③峰延保育所

本保育所は、美唄市から岩見沢よりに約 10 キロほど離れた場所に位置している。中心部から離れていることもあり、本来は幼稚園に入園したかったものの、近所に幼稚園がないために保育園に来ているという子どももいるという地域性をもった保育所である。

◇当日の行程

10:00～10:30　宿泊先から峰延保育所へ移動

10:30～11:15　準備

11:15～12:00　ふれあいコンサート

12:00～12:15　後片付け

12:15～12:45　ゆ～りん館へ移動

12:45～13:30　昼食

◇ふれあいコンサートの様子

前述の２園よりも３歳未満児の比率が高く、音楽の演奏に対する反応が期待したものとなるか心配されたが、子どもの発達心理学的な見地からみると、３才児は音に対する反応が活発に現れる年齢であり、心配は杞憂で終わった。このことには、前述の茶志内双葉保育園と同様、周囲の保育士の支援が重要なポイントとなっていると考えられる。さらに、保護者の参観が多かったこともこれを後押ししていると考えられる。

このことは、その集団に属する子どもたちの性格や気質にも依るが、保育士が学生の問いかけに対して雰囲気を盛り上げるように反応したり、子どもたちをうまく乗せて、発言しやすい環境を形成していることが大きな要因として考えられる。

また、本保育所も茶志内双葉保育園と同様、ステージがないフラットな位置関係で演奏することができ、終了後は上記の写真にあるように、誰から勧められるともなく〈ハイタッチ〉で退場していくなど、終始、音楽を通した双方向のコミュニケーションが円滑に行われやすい環境下での演奏ができた。

④認定こども園ひまわり

本園は旧三井美唄炭鉱の下に広がる南美唄地区にあった保育所を改組転換し、認定こども園として再スタートした園である。市内中心部から３キロほど南に位置し、地域の保育の拠点として子育て支援機能を有する施設として稼働している。（写真不掲載）

◇当日の行程

9:00～ 9:35　札幌から美唄へスーパーカムイ７号で移動

9:45～10:00　JR 美唄駅より公用車で移動

10:00～10:30　準備

10:30～11:10　ふれあいコンサート

11:10～11:30　後片付け

11:30～11:55　移動（ゆ～りん館）

11:55～13:00　昼食

◇ふれあいコンサートの様子

これまで訪問してきた保育所で確認できた点が追認される結果となった。

１つめは、ステージの有無で子どもたちの反応の傾向が異なるという点である。本園での演奏はステージに上がってだった。すると、以前の訪問先で示唆された「子どもたちの動線の自由さ」「子どもたちの目線のフラット化」という点において、やはり動線が小さくなったり、目線が上方向のため後ろの方に座っている子どもたちが見づらくなったりする傾向が見られた。

２つめは、保育者の先生たちの関わり方によって、子どもたちの反応が異なるという点である。本園は比較的子どもたちの反応が小さかった。これは、ステージと客席という一線を画した位置関係の維持に努めようとする先生たちの動きに影響を受けていると考えられる。勿論、子どもたちの性格や気質も要因として考えられるが、もし音楽を「黙って静かに聴きましょう」といった規範的な面だけで捉えていたとするならば、本研究が目指しているふれあいコンサートの趣旨は半減することが予想される。

子どもたちは、自主的に聞こうとすると結果として静かになるし、積極的参加して音楽に入り込もうとすると、当然身体が動いたり歌が出てきたりする。このような自然で主体的な音楽活動をうまく引き出しつつ、単なる規範的な面だけを取り上げることにならないための重要なポイントを本園の子どもたちは示してくれたと言えよう。

⑤中央保育所

前述の進徳保育園と同様、平成 27 年度末をもって統廃合による閉所が決定している中央保育所は、開所以来 46 年間同じ園舎を使用していたこともあり、至るところに時代を感じさせる様子を感じ取れる。ちょうど、閉園行事の直前ということもあり、卒園を控えた子どもたちにとっては、思い出作りの一環としても位置づけられていた。

◇当日の行程

13:00～14:55　自由時間　※午睡時間にかかるため長めの休憩時間

14:55～15:15　中央保育所へ移動

15:15～15:40　準備

15:40～16:10　ふれあいコンサート

16:10～16:30　後片付け

16:30～16:50　宿泊先（ゆ～りん館）へ移動

◇ふれあいコンサートの様子

美唄市の中心部に位置する中央保育所は、地域の高齢化と過疎化により子どもの人数が激減し、かつ風邪が流行っていた時期と重なったため、参加した子ども数は20名足らずであった。演奏者はステージに上がったが、司会者は子どもたちと同じフロアに降り、子どもたちとの距離を縮めようと努力した。また、全員ござの上に座っての鑑賞だったため、自由に足を動かすことが難しく、音楽に合わせて自由に身体を動かせるような演奏の時には、子どもたちを立ち上がらせるなどの工夫をした。

この回になると、学生たちも子どもたちとのコミュニケーションに慣れ始め、保育士の先生たちが何もしなくても、学生たちがうまく子どもたちを音楽の世界に引き込み、集中して聴いたり、積極的に歌ったりといった子どもたちの自主的な音楽活動を引き出すことができるようになった。

：

⑥美唄めぐみ幼稚園

美唄市内に位置する私立幼稚園２園のうちの一つが「美唄めぐみ幼稚園」である。昨年度訪問した「美唄アカシヤ幼稚園」と共に、美唄市の幼児教育を私学の面から支えてきた園である。園舎は新しく、音がよく響く講堂での演奏となった。

◇当日の行程

9:40～10:00　移動

10:00～10:30　準備

10:30～11:10　ふれあいコンサート

11:10～11:30　後片付け

11:30～11:50　移動（ゆ～りん館へ）

11:50～13:00　昼食

◇ふれあいコンサートの様子

今年度初めての幼稚園での演奏である。年齢構成が保育園と異なることから、子どもたちからは明確な反応が多く返ってきた。また、先生たちからの言葉による指示が多く見られた。園によって様々な教育理念や教育目標があり、音楽活動の位置づけも様々である。学生の発案により、本園では初の試みとして、子どもたちが手作りの楽器（ペットボトル）によって演奏に参加することに挑戦した。この試みは、子どもたちとの音によるコミュニケーションを図るための方策として考えだされた。子どもたちは音楽（おもちゃのチャチャチャ）に合わせて手作り楽器を鳴ら

したが、子どもの人数分の楽器が用意できなかったり、合わせて演奏するのが1曲で物足りなさを感じたりしている様子が伺えた。

一方、本園でもステージと客席の境目がないフラットな位置関係で演奏したが、やはりこの位置関係の方が子どもたちが動きやすいのではないかと考えられる。さらに、本園では子どもたちが全員椅子に座って鑑賞しており、状況に応じて直ぐに立ったり座ったりできることも、音楽の特性を活かした活動に寄与するものと考えられる。

なお、本園での演奏は音がよく響く講堂での演奏であった。全てが管楽器で構成される演奏であるため、当初は響き過ぎにより音量が大きすぎるのではないかという問題が懸念されたが、10名前後の演奏者による演奏ではその問題が生じることが殆ど無く、演奏する学生も子どもたちも快適に音楽を楽しめたと考えられる。

⑦西保育所

本保育所も平成27年度末をもって統廃合による閉所となる保育所である。これまで訪問してきた保育所の中では唯一、全ての子どもが椅子に座って鑑賞するというスタイルの演奏ができた。子どもの人数は最も少なく、14名であった。

◇当日の行程

13:00～14:55　自由時間　※午睡時間にかかるため長めの休憩時間

14:55～15:15　西保育所へ移動

15:15～15:40　準備

15:40～16:10　ふれあいコンサート

16:10～16:30　後片付け

16:30～16:50　宿泊先（ゆ～りん館）へ移動

◇ふれあいコンサートの様子

最も小規模な演奏環境であること、また子どもの人数が14名と最も少ないという条件であることから、当初は子どもたちと音楽を通してうまく交流ができるかどうか心配されたが、司会者の学生の手腕と、会場に合わせた演奏により問題なく終了できた。

まず、司会者の学生は、マイクロフォンを使って拡声することなく、会場の広さに合わせた声の大きさまた、子どもたちに語りかけるような口調を心がけた。このことは楽器の音量にも通じる大切なことであり、会場の広さや音の響き具合に合わせた音の調整は、子どもたちの音楽への関心や司会者への集中度へと直結すると考えられる。

「叫ばない」「怒鳴らない」「張り上げない」という司会者の学生の声の使い方は、保育士の先生たちからの絶賛されるほど素晴らしい使い方であり、音・音楽による交流を趣旨としている本研究に於いて再認識されるべき点であった。

また、写真からもわかるように演奏する学生と子どもたちの距離は、すぐ手の届くような位置関係にあり、また全員が椅子に座っていることから手足を動かしやすく、一体感を感じながら音楽交流ができるという環境が整っていた。楽器の音量さえ問題にならなければ、このような環境での音楽交流は、小規模園ならではの交流の方法として大切にしていく必要があろう。

⑧東保育所

本保育所も平成27年度末をもって統廃合による閉所となる保育所である。演奏環境は、前述の西保育所とは異なり、演奏者と子どもたちの距離があり天井も高く、比較的大音量であってもうるさくならない環境である。

◇当日の行程

9:50～10:00　東保育所へ移動

10:00～10:30　準備

10:30～11:10　ふれあいコンサート

11:10～11:30　後片付け

11:30～11:50　JR 美唄駅へ移動

◇ふれあいコンサートの様子

本保育所の訪問をもって、美唄市内の全ての幼稚園と保育所を訪問したことになる。ふれあいコンサートは、子どもたちに音楽の楽しさ素晴らしさを一方的に伝えようとするのでなく、音・音楽を通したコミュニケーションを重視することを大切にしてきた。このことは、次年度統廃合で新しく生まれる「ピパの子保育園」での演奏を視野に入れての取組である。

本保育所でも他の演奏と同様にアイスブレイク的な司会の学生の一言から始まり、参加型の演奏、ペープサートを使った付随音楽的な演奏、身体を動かす音楽あそび的な演奏と、多岐多様な演奏を盛り込んで実施した。環境が毎回異なるものの、回を重ねる毎に学生の司会や演奏での働きかけに余裕が生まれ、子どもたちの様子に合わせたアプローチができるようになってきた。これは、〈新型アウトリーチ〉の実践の副産物であるが、子どもたちだけでなく「触媒」となった学生たちも成長できるという互恵関係が認められたという点で、継続的事業化の可能性が示唆されると言える。

(2)ワークショップ型演奏会「美唄市民文化祭音楽祭」

美唄市民文化祭音楽祭（以下、市民音楽祭）は、美唄市が炭鉱町として栄えていた頃から続いている、平成27年で63回を迎える伝統行事の一つである。演奏される音楽のジャンルは邦楽から洋楽、クラシックギターや合唱、吹奏楽に至るまで幅広く、ジャンルを超えた様々な演奏が行われている。

しかしながら、自分の関係者の演奏を聴いたら直ぐに帰ってしまうという観客が後を絶たず、主催者や教育委員会の関係者からは、音楽祭の最後を締めくくるような演奏が必要という指摘がなされていた。

そこで、昨年度（平成26年度）より、市民音楽祭の最後を締めくくるステージとして、小学生、中学生、高校生、一般成人による合同演奏を本学の学生や札幌交響楽団OBなどが触媒役となって構築し、観客が最後まで残り拍手を送るという新たな流れが生まれた。今年度はその2回目の取組となる。

◇参加団体

美唄市民吹奏楽団、Pipa!トロンボーンアンサンブル、美唄尚栄高等学校吹奏楽部、美唄中学校吹奏楽部、美唄東中学校吹奏楽部、中央小学校スクールバンド、SIUシアターオーケストラの計7団体総勢96名

◇指揮・全体指導

石井邦紀氏（美唄市民吹奏楽団常任指揮者）

◇演奏曲

マーチブルースカイ（高木登古）、陽はまた登る（スパーク）、祝典行進曲（團伊玖磨）、希空（澤野弘之）

◇日程

平成27年11月7日（土）

9：10　美中　楽器等搬出

9：25　中央小　楽器等搬入、搬出

9：50　市民会館大ホール　楽器等搬入、国際大学学生合流

（10：20）集合時間　　木管グループ　中央小

　　金管グループ　市民会館大ホール

10：30　　練習開始

12：00頃　　金管グループ　中央小へ移動

12：15　昼食　中央小　　体育館、家庭科室、図書室

13：00　市民会館大ホールへ移動

13：15　場所決め

　　全体練習開始　　市民会館大ホール

15：30　全体練習終了・後片付け

平成27年11月8日（日）

（9：20）集合時間　（中央小児童以外）　　市民会館大ホール

9：30　準備音だし

10：00　リハーサル

11：30　控え室（大会議室）へ移動

11：30～12：30　昼食　　各自

13：00　音楽祭開始

（14：50）集合　市民会館大会議室

15：00～15：40　音だし　準備　大会議室　出場準備　中央小児童合流

16：05～16：15　準備

16：15～16：30　演奏会

16：30～17：00　後片付け

17：30 頃　中央小　楽器等搬入

17：45 頃　美中　　楽器等搬入

◇ワークショップ及び合同演奏の様子

昨年度（平成 26 年度）、本学からの呼びかけによって始まったこの合同演奏は、年齢構成、活動場所、活動時間がそれぞれ異なることから、それぞれの団体の意思疎通をいかに効果的に形成していくかが当初からの課題であった。

そこで、今年度は各団体の代表者の打ち合わせ会議に加え、メーリングリストを活用しての情報共有が行われた。また、昨年度は各楽器ごとにレッスンを兼ねてパート練習を実施したが、楽器によって内容に違いがあり過ぎる、楽器によっては指導者を確保できないなどの問題点が指摘されたため、今年度は、合奏を念頭に置いた木管楽器、金管・打楽器という大きな二つの括りでワークショップを実施することになった。

また、今回の指揮者は、〈新型アウトリーチ〉の定義に掲げた「イ：美唄地域のハイパー・アマチュアと一般住民を繋ぐことで、その地域で中心となって活躍するイニシエーター（地域を活性化させる人材）を育成する。」という観点から、美唄市民吹奏楽団の常任指揮者である石井邦紀氏に依頼することになった。また、1 日目の木管楽器と金管・打楽器の分奏の指導者として、木管楽器は、昨年度の合同演奏の指揮者を務めた美唄中学校の橋本均氏に指導を依頼し、金管・打楽器は今回の指揮者である石井邦紀氏が務めた。

1 日目の午前中に分奏を終えた参加者は、午後から全体合奏の練習に参加した。事前に楽譜が配布され演奏するパートも確定したうえでの練習参加ではあったが、日頃からコミュニケーションを取り慣れている指導者以外の指揮で演奏することは、アマチュアにとっては難しく、最初は指揮の見方がわかりづらい様子が伺えた。また、指揮者が要求する音がどのような音であるかについても、日頃から慣れている伝え方ではないため、なかなか指揮者の要求に応えられない様子も見られた。

しかし、見慣れていない指揮と初めて演奏する演奏仲間であるからこそ、短時間でいかにコミュニケーションを図るかということをお互いに意識する結果となり、僅か数時間の合同合奏練習とは思えないほどの緻密で迫力のある演奏が展開された。

また、小学生にとっては経験豊富な大人が演奏する中で演奏する機会は皆無に等しく、音楽を通した異年齢交流が図られ、演奏面での刺激も大きかったとする顧問からの感想も寄せられた。

一方で、合同演奏ならではの苦労もあった。例えば、大型の楽器の準備はどの団体がするのか、児童生徒の引率の仕方、総勢96名という演奏者の待機場所や楽器の配置、舞台転換等々、大人数でしかも複数団体によって構成される運営面での難しさは、今年度も散見された。

しかしながら、演奏終了後の客席からの大きな拍手、大人数の演奏の楽しさ、異年齢交流の楽しさ等、この合同演奏でしか得られないメリットは大きく、運営面の難しさがあったとしても、次年度以降も継続したいという意志が団体間で確認された。

札幌交響楽団OBや札幌国際大学の学生が「触媒役」となって始まったこの合同演奏は、地元住民が音楽活動の主役であることを再認識させる〈新型アウトリーチ〉の一つのスタイルとして、平成27年度も終了した。

### (3)成果発表及び意見聴取

本研究による種々の取組は、美唄サテライト・キャンパスとの協働事業の一つとして位置づけられており、本学と美唄市との互恵関係を約束した連携協定の下で展開されている。その成果は、毎年度「美唄サテライト・キャンパス成果発表会」で広く市民及び大学関係者に公開されている。

①美唄サテライト・キャンパス成果発表会

◇日時

平成28年1月23日（土）15：00～17：30

◇場所

美唄市民会館大会議室

◇参加団体

札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部

学長　越塚　宗孝

短期大学部　幼児教育保育学科長　教授　河本　洋一

スポーツ人間学部長　教授　国田　賢治

札幌大学

副学長　本間　雅美

札幌大谷大学

学長　巌城　孝憲

芸術学部長　教授　森田　克己

社会学部長　教授　平岡　祥孝

◇成果発表の概要

13 講座、参加人数延べ 222 名にのぼる「美唄サテライト・キャンパス」は、美唄サテライト・キャンパス運営協議会（会長：髙橋幹夫市長　副会長：岸本邦宏美唄商工会議所会頭・早瀬公平美唄市教育長）によって運営されており、年度ごとにその取組成果を発表し、広く市民や大学関係者から意見を聴取している。

本研究『音楽交流による地域づくり～美唄市における試み～』は、美唄サテライト・キャンパスにおける「地域と大学の連携による協働事業」の一つとして位置づけられており、主に「市内の小中学生などが専門的な技術指導や本物の美術作品に触れ、また、市内の音楽団体や小中高校生と大学生との音楽交流により、技術の向上や今後の音楽活動の大きな支援」（７．付録資料参照）として美唄市民に認識されている。

一方、本学としては、地域連携協定に基づく研究フィールドとして美唄市を捉えており、美唄市と本学の相互にメリットがある互恵関係の下で事業が展開されている。音楽交流によるまちづくりへの貢献以外には、札幌国際大学卓球部によるレッスンや交流試合、札幌大谷大学によるアートキャラバン、札幌大学による出前授業などがある。

さて、成果発表会では、本取組を担当した河本洋一から、『アウトリーチの現状と課題』と称して成果報告が行われた。（７．付録資料参照）この中で河本は、これまでのアウトリーチの主流は、「派遣・提供型」であったことを指摘し、その問題点として、「官製興行化」「エビデンス（効果）測定不足」「他の政策領域との関連不足」「人材を招くコストの増大」を指摘した。これらの指摘は、財団法人地域創造によって、平成 22 年 3 月に報告があった『文化・芸術による地域政策に関する調査研究報告書』に基づいた指摘である。

そこで河本は、これらの問題を解決する鍵は、〈ハイパー・アマチュア〉の活用にあると提言した。〈ハイパー・アマチュア〉とは、プロと一般住民との間に位置する、プロではないが高度な芸術性をもった人々のことを指すと定義している。そして、これらの人々は、活動することそのものに喜びを感じ、発表する場を必要としているが、活動することを生業とはしていないと述

べた。そして、アウトリーチを、「派遣・提供型」から「人の仕組み構築型」へと転換する必要があることを強調した。

続いて河本は、従来のアウトリーチに代わる考え方として、〈新型アウトリーチ〉を提唱した。〈新型アウトリーチ〉の条件としては、「プロよりもハイパー・アマチュアと一般住民を繋ぐイニシエーター（活性化させる人材）を育成すること。」「実施後の効果測定の項目や方法が予め設定されており、エビデンスの明確化の仕組みがあること。」「提供だけでなく、提供を通してまちづくりの何に寄与できるかが具体的に想定されていること。」「コスト削減とハイパー・アマチュアの演奏機会の増大の二つの課題を一気に解消する場を設定すること。」という 4 つの条件を提示した。

これら上記 4 つの条件を満たす事業を社会実験する場として、連携協定が結ばれている美唄市を選定し、体験型演奏会のふれあいコンサートやワークショップ型演奏会の市民音楽祭の合同演奏が実施された。そして、今後のキーポイントとして、〈イニシエーター〉（活性化させる人材）の育成を挙げ、今後は「キャンプ（演奏者間の音楽交流）」「デリバリー（演奏会の主催または指導によるイニシエーター養成）」「ワークショップ（参加型演奏会）」を実施し、期待される効果の事前明示、参加者や観客への意識調査や追跡調査による効果測定をする計画であることが発表された。

特に、美唄市内の幼稚園・保育所の全てを訪問演奏で巡回できたことは、追跡調査の実施基盤として大きな価値があり、今後展開が予想される音楽活動の発展性への寄与が期待された。

また河本は、効果測定の一つの指標として費用対効果を指摘した。音楽文化の普及啓発のために無料で演奏会が開催されることがあるが、アマチュアであろうとプロであろうと、必ず経費が発生しており、その経費を正しく認識すること無くして活動の発展性や永続性は考えられないという指摘である。

最後に、合同演奏に参加した小学校のスクールバンドの顧問菅谷先生から、「子どもたちが大きな刺激を受けている。是非、本校の演奏会に賛助出演してくれる方を募集したい。」という声があったことが紹介された。これについて河本は、「演奏会の観客のみなさんは、演奏という結果のみしか共有できない。これはこれで素晴らしい体験なのですが、演奏者の皆さんはその音楽を創り上げていく過程も共有している。この過程にこそ音楽を愛好する心情を育てていくという機会が隠されている。」と述べた。そして、部活動で音楽活動をしている子どもたちが、卒業後はその音楽活動を捨ててしまうという残念な現実と絡め、「異年齢間での音楽交流は、音楽を通したコミュニティの形成に効果的であり、音楽活動が部活動という場だけの出来事ではなく、一生の活動としてその人の人生を潤してくれる。」という言葉で成果発表を締めくくった。

この発表に対して参加者からは、「次代を担う若者や地域で活動する市民活動団体等が、地元でこうした経験ができることにより、美唄に愛着を持つ契機となり、市民との協働によるまちづくりを進めることができると考えています。」「大学及び学生に多様な形での実践的な教育活動の場を提供できたものと考えています。」「今後とも小中学生や高校生、市民活動団体等との協働による事業展開を進めていくとともに、高齢者や地域住民との協働による事業を展開していきたいと考えています。」（美唄サテライト・キャンパス運営協議会総会資料より）という発言が寄せられた。

なお、この成果発表会は、ふれあいコンサートの第２期が完了する前に開催されたため、成果発表の内容にふれあいコンサートに関するものが全く含まれていないという不完全な形での発表となった。したがって、ふれあいコンサートに関する一般市民からの意見聴取は行われなかった。

## 第4節　平成27年度の取組の考察

平成 27 年度の研究目標は、「市内の保育所と幼稚園での体験型演奏会の実施によるデータ抽出」であった。この目標に基づき美唄市内の保育所と幼稚園全園をふれあいコンサートで巡り、演奏を通じて先生方や子どもたちの生の声に触れることができた。しかし、第２期の実施日程が２月であった関係上、その成果を「美唄サテライト・キャンパス成果発表会（１月２３日）」で報告することができず、報告できたのはワークショップ型演奏会のみという不完全な結果報告に終わってしまった。

このことは、仮説→実践→検証→報告という研究の流れに不足を生じることから、平成 28 年度において早急に改善しなければならない。この改善点を念頭に置いた上で、それぞれの取組から読み取れる成果や今後の課題について整理しておきたい。

### (1) 体験型演奏会「ふれあいコンサート」

#### ①市内の全保育所･幼稚園の訪問完了で今後の聞き取り調査の基盤が確立

平成 27 年度をもって美唄市内の全ての保育所と幼稚園の訪問演奏を完了した。このことは、参加した子どもたちが、ふれあいコンサートという共通する音楽体験を経験したという意味に於いて、今後の追跡調査の基盤へと発展させられる可能性を作り上げたと言える。また、平成 28 年度には市内中心部の保育所が統合され「ピパの子保育園」として再スタートすることから、この新

設保育園で改めて、ふれあいコンサートを実施することで、子どもたちがこのコンサートをどのように捉え、どのような効果をもたらしたのかを検証することができると考えられる。

また、平成27年度までのふれあいコンサートに子どもたちと共に参加した保育士の先生方も1箇所に集まるため、これまでのコンサートとの比較や子どもたちの様子の変化、今後の課題などについて、効果的な聞き取り調査をすることが可能となることが予想される。

②ふれあいコンサートの方向性の明確化とそのための人的物的環境の構成の検討が急務

一方、平成27年度の訪問先では、①子どもたちと関わる先生方の様子、②演奏する物理的環境の２つについて、事象から示唆される点があることがわかった。

まず、子どもたちと関わる先生方について、「静かに聞きましょう。」「お行儀よくしましょう。」などのような規範的な指示を中心とする言葉がけしかない場合と、子どもの反応に同調して、それをさらに強化していくような言葉がけをする場合とでは、コンサートの導入部に於いて明らかな差が生じていた。規範的な指示による言葉がけがあった集団では、確かに子どもたちは静かにしているのだが、司会者の学生の言葉がけに対する反応が鈍かった。一方、子どもの反応に同調し強化していくような言葉がけがあった集団では、司会者の学生の言葉がけには、最初から元気な反応が返ってきた。このことは、その環境下で最も身近な存在の人の言葉がけによって導入部の準備性ができ上がっていくことを示唆していると考えられる。

次に、演奏する物理的環境については、ステージの有無、天井の高さ、演奏する部屋の面積、演奏者と子どもたちの距離、座り方（椅子からゴザか）、マイクロフォンの使用の有無などが環境構成として挙げられる。

今回のコンサートを通じて確認できたことは、下記のとおりである。

ア：ステージは必ずしも必要ではなく、できるだけ子どもたちと同じ目線に立てるフラットな位置関係の方がよい。

イ：すぐ自由に動けるためには、ゴザよりも椅子席の方がよい。

ウ：マイクロフォンは無理に使う必要はない。肉声のほうが効果的な場合もある。

エ：天井の高さや部屋の面積により演奏者と子どもたちとの距離感が決定されるため、あまり広すぎると一体感が乏しくなる。

これらア～エの指摘は、その音楽活動の目的が何であるかによって、その意味が変わってくる。この指摘は先述の言葉がけに関する指摘と相俟って、体験型演奏会が目指すべき方向性を改めて明確にした上で、再検討されるべき事案である。なぜなら、演奏者と子ども（聴衆）の間を明確

に区別する関係性を求めるならば、規範的な言葉がけも有効であるし、物理的環境の構成要因も天井が高く広々とした空間が必要となる場合もあるからである。

このように体験型演奏会が目指すべき方向性については、本研究に於いて予め明示されずに事業が展開されてきた。この点について明確化することが、ふれあいコンサートという仕組みが新型アウトリーチの中でどのような効果をもたらすのかというエビデンス測定のために必要急務である。

そこで、学生が〈触媒役〉となり、子どもたちの音楽活動を活性化させるという当初の趣旨はそのまま、その趣旨の具体的な姿として、どのようなふれあいコンサートを目指すのかについて、平成 28 年度当初に定義付けすることとしたい。

### (2)ワークショップ型演奏会「美唄市民音楽祭」

#### ①〈ワークショップ型演奏会〉がもたらした〈誇り〉と〈喜び〉

平成 26 年度に引き続き、平成 27 年度も市民音楽祭におけるワークショップ及び演奏会を実施した。ここで改めて本研究における〈ワークショップ型演奏会〉の定義について確認しておきたい。

一般的にワークショップとは、仕事場や作業場を示す言葉であるが、体験型の講演会といった意味ももっており、参加者が見たり聞いたりするだけでなく、実際に具体的な行動を体験し、五感全体を通して理解を深めるという形態を示す意味でも用いられている。

本研究では、「美唄地域のハイパー・アマチュアと一般住民を繋ぐことで、その地域で中心となって活躍するイニシエーター（地域を活性化させる人材）を育成する。」（新型アウトリーチの定義「イ」より）ことを目指しており、地元のハイパー・アマチュアによる指導と共に、彼らと共に演奏することまでを含めた演奏会を〈ワークショップ型演奏会〉と称している。

平成 26 年度は、「地域外の人材（札響 OB やセミプロ等、本学学生）による様々な活動がいわば〈触媒〉となって、地域住民の芸術文化活動を活性化させる。（新型アウトリーチの定義「ア」より）という定義に基づき、札幌交響楽団の元首席トロンボーン奏者真弓基教氏を招き、主にトロンボーンの基本的な演奏法に関するワークショップを実施した。また、その他の楽器については、札幌国際大学の学生が中心となって合同演奏の曲の練習を進めた。真弓氏のワークショップは本格的な指導を受けられたということもあり好評だったが、その他のパートの練習は学生がうまく練習を進行できず、必ずしも効果的な練習が行われたわけではなかった。

そこで、平成 27 年度は無理にパート練習を実施するのではなく、分奏（木管楽器、金管・打楽器という大きな括り）で練習を進め、真弓氏が前年度担った役割を地元のハイパー・アマチュアの方々に引き継いでもらい、ワークショップを実施するという形態に変更した。パート練習が無

くなるため、演奏する曲の楽譜は早めに配布し、事前に譜読みを済ませた状態で分奏するように徹底した。また、正指揮者の石井氏と副指揮者の橋本氏の間で事前に綿密な打ち合わせを行ってもらい、どのような演奏へ仕上げていくかを事前に共通理解した上で練習が進められた。

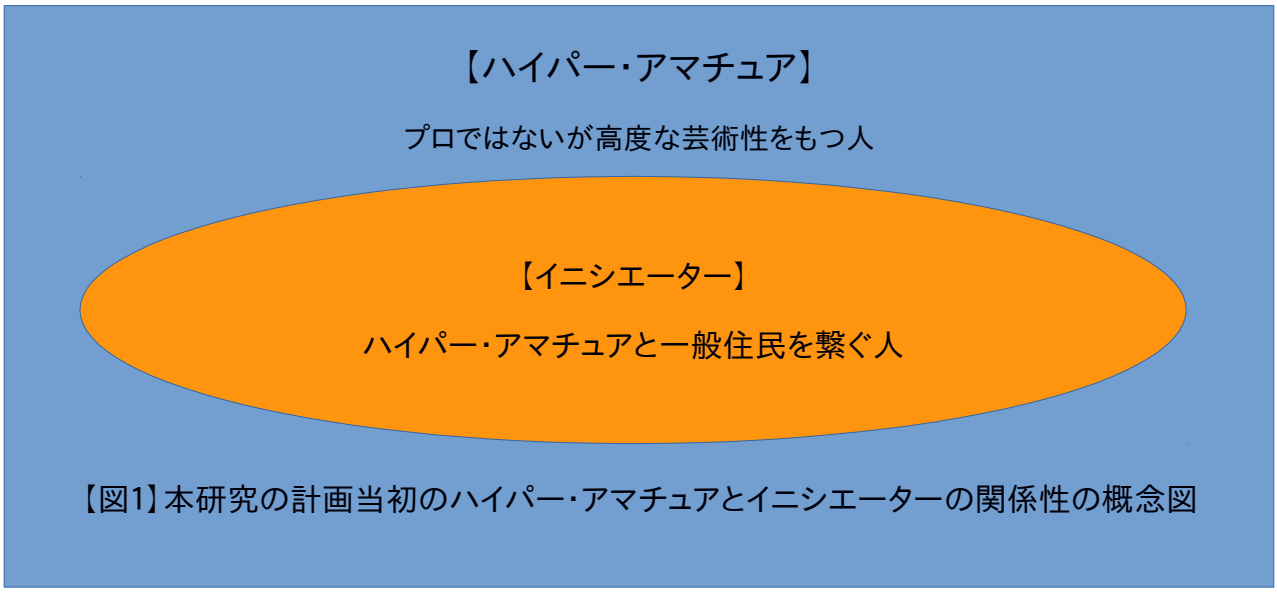
このような合同演奏は、郡部地域を抱える地区の高等学校文化連盟の音楽発表会などで見られる形態である。日頃は小編成でしか演奏することができない高校にとっては大編成での演奏を体験することができ、また、いつもとは違う指導者での演奏は、音楽の新たな演奏経験として生徒たちの糧となる。美唄市民音楽祭での合同演奏も、美唄東中学校や美唄尚栄高等学校にとっては、日頃は体験できない大編成での演奏する機会となると共に、美唄中央小学校の児童にとっては、自分たちよりも経験豊富な人たちと共に演奏する機会となる。さらに、子どもから大人までが一つの音楽体験を共有することで、美唄市民が世代を超えて一体感を得ることができ、観客も普段は聴く機会がない地元住民だけによる大編成の演奏を体験することで、自分たちの町の誇りや喜びに繋がるといった効果も期待できる。

この〈誇り〉や〈喜び〉は、「美唄でもこんなに迫力のある演奏ができるなんて、感動でした。」「美唄も捨ててもんじゃない。」といった来場者からのアンケート結果からも裏付けられる。音楽の演奏は、演奏する人だけでなく、それを聴いている観客も様々な感情を得ることができる。さらに、その体験をする時間を共有することから、スポーツ観戦などと同様に強い一体感を与えることができる。特に、音楽体験は言葉やメロディに乗せた様々な抽象的なメッセージ性をもっている点で、スポーツよりもより多様な感情や一体感を生むことが可能である。

このような音楽体験がもたらす効果を、地元のハイパー・アマチュアが中心となって引き出している点が、平成 27 年度の特筆すべき点である。つまり、〈新型アウトリーチ〉が目指している、「美唄地域のハイパー・アマチュアと一般住民を繋ぐことで、その地域で中心となって活躍するイニシエーター（地域を活性化させる人材）を育成する。」という定義を具現化するものとして、ワークショップ型演奏会としの合同演奏が、そのねらいどおりに行われたと考えられるということである。

②〈ハイパー・アマチュア〉と〈イニシエーター〉の関係性の再定義の必要性

ところで、この取組を通じて、新たな課題も発見された。それは、〈ハイパー・アマチュア〉と〈イニシエーター〉の概念の再検討の必要性である。（下図参照）　本研究では、〈ハイパー・アマチュア〉を、「プロと一般住民の間に位置する、プロではないが高度な芸術性をもった人々を意味する。これらの人々は、活動することそのものに喜びを感じ、発表する場を必要としているが、活動することを生業とはしていない。」と定義してきた。この定義に基づく具体的な例としては、音楽の演奏について、専門家の指導を受けてきた音楽系大学等の卒業生、または、




【図1】本研究の計画当初のハイパー・アマチュアとイニシエーターの関係性の概念図

これに匹敵するような専門知識と技術をもった演奏家を想定している。例えば、地元の音楽教室や学校の音楽の先生、音大卒業生や楽器の経験年数が長い成人などがこれに該当する。

このような〈ハイパー・アマチュア〉は、過疎化が進む町の中にも少なからず存在し、そのような人々の中から〈イニシエーター〉が出現し、音楽文化の振興を通じて地域の活性化に貢献できるような仕組みづくりができるであろうと本研究では仮定していた。つまり、地元の演奏家の中から〈イニシエーター〉を育てようとする考え方である。

しかしながら、〈イニシエーター〉は必ずしも演奏家である必要はないのではないか、ということが本取組で示唆された。それは、美唄サテライト・キャンパス運営協議会が用意した合同演奏の分奏と本番の間の昼食から読み取ることができる。

平成 27 年度より美唄サテライト・キャンパスの協働事業である〈ワークショップ型演奏会〉に事業費が計上されたこともあり、合同演奏に参加する市民や大学生には、地元名産の〈美唄とりめし〉が振る舞われた。この昼食は地元の農家らが経営する〈美唄とりめし〉のデリバリーサービスで、炊き出しなどで使用される大きな釜いっぱいに〈美唄とりめし〉が炊きあがった状態で運ばれくるというものである。

日本では、「同じ釜の飯を食う」という諺がある。演奏のワークショップだけでなく、食事を共にすることは、参加者の気持ちを繋ぐことに貢献し、演奏面以外での一体感を高めるだけでなく、味覚が伴う演奏体験として参加者の脳裏に刻まれる。

このような音楽プラス α の体験によって地元の音楽愛好家らを繋ぎ合わせることは、演奏家以外の立場の人であっても〈イニシエーター〉になり得ることを示していると言えよう。

そこで、本研究の計画当初の〈ハイパー・アマチュア〉と〈イニシエーター〉の関係性の概念については、演奏家である〈ハイパー・アマチュア〉から〈イニシエーター〉を養成するというのではなく、〈ハイパー・アマチュア〉をコーディネートし、地元の音楽家や観客の繋がりを深める仕組みを提供する存在として、再定義することが必要であるとの考えに達した。（下図参照）

この考え方に従うと、〈イニシエーター〉は様々な立場や職種の人が担うことができることがわかる。例えば、今回のような食事を提供できる人は、〈ハイパー・アマチュア〉を食を通じて繋ぐことができる。また、空室や空き地といったいわゆる〈空き資源〉を提供できる人は、演奏活動をできる空間を通じて〈ハイパー・アマチュア〉を繋ぐことができる。

このように〈ハイパー・アマチュア〉の人々を繋ぐことによって、高度な芸術性をもつ人々の様々な交流が生まれ、そこにさらに若いアマチュアや一般市民が参加する仕組みが生まれることが期待できる。

偶発的な発見ではあったが、〈イニシエーター〉が〈ハイパー・アマチュア〉ではなく食事の提供者といった立場の人々でも可能であることを発見できたことは、一見すると関係性が薄いアマチュアの音楽活動と観光資源を関連付けた取組の必要性を示していると考えられる。

## 第3節　今後の課題

本研究は〈新型アウトリーチ〉による地域づくりのモデル化の研究である。改めて〈新型アウトリーチ〉の定義を確認してみよう。

【ア】地域外の人材（札響OBやセミプロ等、本学学生）による様々な活動がいわば〈触媒〉となって、地域住民の芸術文化活動を活性化させる。

【イ】美唄地のハイパー・アマチュアと一般住民を繋ぐことで、その地域で中心となって活躍するイニシエーター（地域を活性化させる人材）を育成する。

【ウ】実施後の効果測定の項目や方法が予め設定されており、エビデンスの明確化の仕組みがある。

【エ】提供だけでなく、提供を通してまちづくりの何に寄与できるかが具体的に想定されている。

【オ】コスト削減とハイパー・アマチュアの演奏機会の増大の二つの課題を一気に解消する場を設定する。

定義「ア」と「イ」に関しては、既に具体的な事業化がおこなわれており、様々な効果を確認できている。しかし、「ウ」「エ」「オ」に関しては、まだ具体的な研究計画が示されておらず、次年度（平成28年度）はこれらの定義に基づく取組について明示しなければならない。

(1)まちづくりへの寄与の具体的設定と効果測定の方法の確立

定義「ウ」と「エ」は対を成す定義であり、まちづくりの何に寄与できるかが具体的に想定（定義：エ）された上で、それを裏付ける項目や効果測定の方法を設定（定義：ウ）しなければならない。つまり、それぞれの取組はこれらの定義を上位概念として設計されなければならないということである。

まちづくりの何に寄与するのかに関する具体的な内容は、美唄サテライト・キャンパス運営協議会の成果発表会でもたびたび議論されてきているが、美唄市のまちづくりとの関連性については、美唄市の担当者と協議の上、より明確に示さなければ効果測定の方法には結びつかない。
よって、平成28年度は、美唄市のまちづくりと本研究との関連性を明示した上で事業計画を再構築する。

また、効果測定の方法については、悉皆調査か標本調査か、到達度評価か満足度評価かといった様々なスケールでの効果測定が考えられる。これについては、先行研究である財団法人地域創造の『文化・芸術による地域政策に関する調査研究報告書』（2010）を参考に、調査項目や調査方法が恣意的な設定とならないように留意しながら、本研究の独自の考え方である〈新型アウトリーチ〉の有効性の検証をおこなっていく。

(2)多様な〈イニシエーター〉の在り方の実践

〈イニシエーター〉は必ずしも音楽家である〈ハイパー・アマチュア〉である必要は必ずしもないことが確認されたことから、平成28年度は多様な〈イニシエーター〉の在り方を提案し、それを実践していく。平成27年度ような食事提供型の〈イニシエーター〉をはじめ、演奏場所提供型や交流促進型など、演奏者同士の交流や観客との交流など、自らの立場や所有環境が触媒となって、音楽の演奏や交流、鑑賞やそれに付随する機会を提供していく人材を養成していく。

なお、このような多様な〈イニシエーター〉の養成については、求められるべき人物像を予め想定しおく必要があると考えられるため、平成28年度の取組の当初、この人物像を明示しておきたい。

### (3)音楽との様々なコラボレーションによる新たな事業構想の可能性の検討

〈イニシエーター〉が多様な立場や職種の人々がなり得る可能性が出てきたことは、音楽が演奏や鑑賞という活動だけでなく、それに付随する活動や環境を巻き込める可能性があることを示唆している。これは【図2】で示した「ハイパー・アマチュアとイニシエーターの関係性」に、ハイパー・アマチュア以外の要素を加えることを意味する。

この考え方では、空室や空き地を演奏場所として活用すること、様々な施設で生演奏を提供すること、ご当地グルメと演奏を関連付けること、音楽以外の表現活動と音楽を関連付けること等々、様々な人や活動を関連付けて音楽を通した諸活動とのシナジー効果を想定している。これらに共通しているのは、関連付けることで美唄市にとって新たなビジネスチャンスを生み出すという点である。想定される実践例は次のとおりである

**①空き資源(空室や空き地)とのコラボレーション**

現在は使用されていない建築物や遊休地での演奏が考えられる。建築物や遊休地の使用については正当な対価を支払う。空き資源の有効活用の実践例は、事業構想大学院大学のアーカイブズを活用する。このコラボレーションでの〈イニシエーター〉は、空き資源を熟知している人材ということになる。

**②様々な施設とのコラボレーション**

美唄市内にある温浴施設や高齢者福祉施設などでの生演奏の提供は、これまでも学生が〈ゆ～りん館〉でおこなってきた。学生にとっては温浴施設を安価に使用させてもらえるというメリットがあり、施設側には宿泊客らに生演奏というサプライズを提供できるというメリットがあり、win-winの関係が成立している。

他にも様々な施設が美唄市内はあるが、このコラボレーションではその施設の環境に適した音楽を提供できるかどうかが鍵となる。したがって、このコラボレーションでの〈イニシエーター〉は、幅広い音楽ジャンルに精通した人材ということになる。

③ご当地グルメとのコラボレーション

ご当地グルメは食するだけでも楽しいが、それに音楽が加わることで演奏する側と鑑賞する側双方に楽しい思い出を刻みこむというねらいがある。美唄市のご当地グルメとして有名なのは〈米〉〈アスパラ〉〈美唄やきとり〉〈美唄とりめし〉〈ハスカップ〉〈くるみ〉などがある。どれもそれ単体で十分楽しめるものであるが、さらにこれに音楽が加わることで、楽しいエピソードとしての記憶をより強固なものにしようというねらいがある。具体的には、ご当地グルメとセットになった音楽合宿、〈ハイパー・アマチュア〉の演奏をバックにした美唄市収穫祭ディナー等が考えられる。したがって、このコラボレーションでの〈イニシエーター〉は、美唄市の食に熟知している人材ということになる。

④様々な表現活動とのコラボレーション

音楽はそれだけでも十分に楽しめる表現活動であるが、これに音楽以外の表現活動が加わることで、総合的な表現活動としてのシナジー効果が期待できる。例えば、演奏されている曲にちなんだ絵画や詩の鑑賞、市民を巻き込んだミュージカルの公演など、規模が大きな表現活動への繋がりも考えられる。したがって、このコラボレーションでの〈イニシエーター〉は、総合的な芸術に熟知している人材ということになる。

# 第4章　平成28年度の研究実績

## 第1節　新型アウトリーチの定型化を目指して

### (1)福祉施設へのアウトリーチの機会拡大

これまで、体験型演奏会「ふれあいコンサート」は、保育所や幼稚園を対象に実施してきたが、３カ年の研究の最終年度となる平成２８年度は、高齢者福祉施設や知的障がい者施設への演奏機会の拡大を計画した。そもそも、アウトリーチとは日常的に音楽文化等を鑑賞する機会が少ない人々への鑑賞機会の提供が根底にあることから、高齢者や障がい者をその対象とすることは、アウトリーチを実践する上で不可欠であると考えた。

### (2)様々な表現活動とのコラボレーションによるアウトリーチの価値の拡大

前年度の取組のまとめでは、「音楽はそれだけでも十分に楽しめる表現活動であるが、これに音楽以外の表現活動が加わることで、総合的な表現活動としてのシナジー効果が期待できる」ことを提言した。この考え方の具現化として、障がいをもつ方々への音楽演奏に〈伝筆®〉[2]という表現形態を絡め、音楽を聴く機会を演奏以外の体験を加えたエピソードとして創り上げることを計画した。

音楽演奏と親和性の高い表現形態が数多くある中で、伝筆を取り上げた理由は、次の三つを挙げておく。一つ目は、崩し文字の一種であり、その文字がもつ意味と音楽の標題などを関連付けやすいこと　二つ目に、崩した文字が、文字が持っている意味以上の雰囲気や印象を想起させるため、絵画と似たような複数のメッセージ性を感じさせること　三つ目に、福祉施設などで演奏を想定している音楽の演奏時間内（1 曲 5～10 分程度）で完成できること、以上三つの理由を挙げることができる。

### (3)エビデンス測定のためのアンケート調査の実施

新型アウトリーチのエビデンス測定については、過去２年間数値的なデータを取ってこなかった。研究最終年度となる平成２８年度は、ワークショップ型演奏会において、演奏者と聴衆の両者に対してアンケート調査を実施し、様々なエビデンスを把握することを計画した。

## 第2節　取組の実施日程

### (1)体験型演奏会「ふれあいコンサート」

◇平成 28 年 8 月 18 日（木）

2　伝筆（つてふで）：崩し文字の一種。一般社団法人　伝筆協会（https://tsutefude.com/about/）によれば、「筆文字が描けたら」という一つの憧れから、誰でも描けるようになるコツを集め続け、できあがったのが伝筆とされている。なお、伝筆（つてふで）は商標登録されている。

10:30～11:30　ライフサポート美唄

14:00～15:00　恵祥園

20:00～　ピパの湯ゆ～りん館

◇平成 28 年 8 月 19 日（金）

10:30～11:30　ピパの子保育園

14:00～15:00　コミュニティホーム美唄

(2)ワークショップ型演奏会「美唄サテライト･キャンパス with 札幌国際大学　合同演奏会」

◇平成２９年３月５日（日）　美唄市民会館大ホール

第3節　各取り組みの内容

(1)体験型演奏会「ふれあいコンサート」

◇目的

これまでの従来型（派遣型・提案型）アウトリーチの音楽交流ではなく、官製興行化、効果測定不足、まちの政策との関連不足、コスト増大の４つの課題解決が見込まれる〈新型アウトリーチ〉を構築する。体験型演奏会「ふれあいコンサート」では、幼稚園・保育所等に音楽鑑賞などの芸術鑑賞の機会を創出することと、幼児教育を学ぶ学生の活動の場を確保することを目的に、札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科が中心となって、〈新型アウトリーチ〉の具体的な活動を企画する。加えて、平成２８年度は、様々な表現形態とのコラボレーションによる展開を加え、音楽を聴くだけでなく、音楽がある総合的な体験としての価値を高めることを目指す。

◇主催

札幌国際大学短期大学部、美唄市サテライト・キャンパス運営協議会

◇演奏曲

【ライフサポート美唄】

・単独演奏：笑点、さんぽ、おもちゃのチャチャチャ、恋するフォーチュンクッキー、襟裳岬、上を向いて歩こう、宇宙戦艦ヤマト

・伝筆とのコラボレーション演奏：世界に一つだけの花、少年時代、負けないで

【恵祥園、コミュニティホーム美唄】

・単独演奏：笑点、北国の春、にんげんっていいな、宇宙戦艦ヤマト、襟裳岬、藁の中の七面鳥、上を向いて歩こう、北酒場、少年時代、夏は来ぬ、ふるさと

・伝筆とのコラボレーション：川の流れのように、夏の思い出、見上げてごらん夜の星を

【ピパの子保育園】

・お弁当（手遊び）、ピクニック（ペープサート）、山の音楽家（子どもが簡易楽器で参加）、かみなりどんがやってきた（手遊び）、海（紙芝居）、南の島のハメハメハ大王、さんぽ

①ライフサポート美唄

ライフサポート美唄は、社会福祉法人北海道光生会が運営する障がい者支援施設である。「生活介護」「施設入所支援」「短期入所」、そして平成 26 年 2 月から新たに「共同生活援助（グループホーム）」を立ち上げ、利用者のニーズに応じたサービスを提供している。

この事業所の特色としては、日中活動における利用定員が 150 名と、大変多い点にあり、このこと、また、スポーツや音楽やエアロビクスといったクラブ活動の提供や、牛乳パックの再生紙製作や窯業、縫製等の生産活動、また特に支援度の高い利用者には散歩などを中心とした個別の活動プログラムに沿って、様々な活動内容を取り入れていることが特徴である。[3]

スポーツや音楽など多彩な活動に日常的に取り組んでいるこの施設では、音楽の演奏を聴くだけでなく、伝筆とのコラボレーションの実践を行うこととした。

なお、伝筆の指導は、一般社団法人伝筆®協会認定講師の谷本あゆみ氏に依頼し、演奏する音楽にちなんだ作品の制作に取り組んでいただいた。

◇当日の行程

3　社会福祉法人北海道光生会ホームページ（http://www.hokkaidokoseikai.org/jigyosho.html）より要約

平成２８年８月１８日（木）

9:00　札幌駅発スーパーカムイ７号

9:35　美唄駅到着、ライフサポート美唄へ移動

10:00　準備

10:30　ふれあいコンサート

11:30　後片付け、移動、昼食

②恵祥園

美唄市恵祥園は、食事や排泄などで常時介護を必要とし、自宅では介護が困難な『要介護1～５』と認定された方が利用できる、美唄市が運営する介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）である。日常生活－起床、食事、消灯の時間以外は原則として自由であり、教養、娯楽、趣味、サークル活動などを通じて楽しく生活できるよう配慮されている。

外出は、毎日朝食後から夕食まで、ご家族の同伴のもと自由にでき、外泊は健康上支障のない方ならご家族同伴のもとで自由に出来、日常的に施設外の方々との交流も図られている。[4]

ライフサポート美唄よりも高齢の方が多い恵祥園では、高齢者の方でも楽しめる演奏曲に差し替えた。また、伝筆とのコラボレーションも実施した。

参加者の中には、日頃から「書」に親しんでいる方もおり、崩し文字の一種である伝筆は、音楽による雰囲気の醸成の中で、楽しく展開された。

4　美唄市恵風園・恵祥園ホームページ（http://www.city.bibai.hokkaido.jp/jyumin/docs/2016031400045/）より要約

◇当日の行程

13:00　恵祥園到着、準備

14:00　ふれあいコンサート

③ピパの湯ゆ～りん館

学生の宿泊先でもあるこの施設では、夕食が終わって入浴が済む時間帯をねらい、子どもから大人までが楽しめる曲を演奏した。この施設での演奏が、年齢層の幅が最も広く、また、演奏に対する観衆の反応についても予測が難しい場面であった。

この施設では伝筆とのコラボレーションは実施しなかったが、何も知らされずに温泉施設を訪れた観客からは、まさか温泉で身近な音楽の生の音楽が聴けるとは思わなかったという「サプライズ」効果が大きかったと言える。

◇当日の行程

17:20～19:30　夕食、準備

20:00～20:30　ふれあいコンサート

④ピパの子保育園

ピパの子保育園は、平成２７年度末をもって閉所した美唄市街地の保育所（中央、東、西、進徳）を統合して開園した保育園である。前年度までに閉所した全ての保育所を訪問していることから、生演奏に触れるのが２回めという子どももいるので、プログラムは、演奏を聴くだけでなく、身体を動かしたり、遊んだりという要素を多く採り入れ、音楽を通した楽しい体験活動となるように工夫を凝らした。

工夫の具体例としては、子どもにも音が出る簡易楽器を持たせて演奏に参加してもらったり、音楽に合わせてペープサートしたりなどした。

◇当日の行程

平成２８年８月１９日（金）

9:40～10:00　チェックアウト、移動

10:00～10:30　準備

10:30～11:30　ふれあいコンサート

⑤コミュニティホーム美唄

コミュニティホーム美唄は、社会福祉法人渓仁会が運営する介護老人保健施設である。介護が必要な状態になっても住み慣れた地域で生活しながら家庭生活への復帰をめざせるよう、美唄市とその近郊に住んでいる方に信頼度の高いサービスを提供する介護老人保健施設である。[5]

5　社会福祉法人渓仁会・コミュニティホーム美唄ホームページ（http://www.keijinkai.com/c-bibai/）より要約

この施設でも、前述の恵祥園と同様の演奏曲とメニューを提供し、単独演奏と伝筆とのコラボレーションを実施した。今回のふれあいコンサートの中では、もっとも演奏会場が広く、音楽を聴いたり、伝筆を楽しんだりすることだけに集中するのではなく、音楽が流れている中で、リハビリをしたり、談笑したりする場面も見受けられ、サロン的な音楽演奏として受け入れられた。

◇当日の行程

11:30～13:00　昼食会場へ移動、休憩

13:15～13:30　移動

13:30～14:00　準備

14:00～15:00　ふれあいコンサート

15:00～15:30　後片付け

15:30～15:45　美唄駅へ移動、解散

（2）ワークショップ型演奏会「美唄サテライト・キャンパス with 札幌国際大学　合同演奏会」

３年目を迎えるワークショップ型演奏会は、当初、例年どおり 11 月上旬に恒例の市民音楽際での合同演奏を予定していた。しかし、大量に積もった雪が、春に融雪水となって美唄市民会館の舞台や電気設備に漏水し、会館が使用できなくなるというアクシデントに見舞われ、11 月に開催することができなくなった。開催が危ぶまれた合同演奏であったが、実施方法を見直し、吹奏楽の団体による合同演奏「会」として再企画した。そして、小学校、中学校、高等学校、社会人までの団体が、合同で演奏するだけでなく、各団体単独の演奏も交え、演奏者がお互いの演奏を聴きあったり、聴衆が自分たちが直接関係していない出演者の演奏を聴く機会となった。

なお、この演奏会に参加した札幌国際大学シアターオーケストラの学生は、美唄市が既存施設を改修して開設した多目的合宿施設〈トマーレびばい〉の宿泊者の第１号として、１泊２日の合宿を経験した。

◇日時　平成 29 年３月５日（日）12:30 開場　13:00開演

◇場所　美唄市民会館大ホール

◇参加団体と演奏曲

・美唄市立中央小学校　スクールバンド

　ジブリメドレー、ブラジル、ベストフレンド

・美唄市立東中学校　吹奏楽部

　行進曲「威風堂々」第１番より、ひまわりの約束、３月９日

・美唄市立美唄中学校　吹奏楽部

勇気100%、明日への扉

・北海道美唄尚栄高等学校　吹奏楽部

コッツウォルズの風景、私のお気入り

・北海道美唄聖華高等学校　吹奏楽部

情熱大陸、SISTER、勇気100%Brass Rock

・美唄市民吹奏楽団&札幌国際大学シアターオーケストラ

AN AmericanClassic、TRIBUTE to COUNT BASIE

・Pipa！　トロンボーンアンサンブル

花は咲く、ふるさとのうた

◇当日の行程

3月4日（土）

12:35　JR美唄駅到着

13:10～15:30　合同演奏練習

16:00～18:00　美唄市民吹奏楽団との練習

18:00～20:00　ピパの湯ゆ～りん館で夕食・入浴

20:00～20:30　合宿先へ移動

3月5日（日）

9:00～11:30　合同演奏練習

13:00～15:10 合同演奏会

15:10～15:45 後片付け、移動

16:00　　美唄駅で解散

## 第4節　事例の考察

### (1)体験型演奏会「ふれあいコンサート」:美唄市職員及び学生への聞き取り調査から

子どもからお年寄りまでの様々な施設への演奏を実施し、美唄市と本学（学生）双方には次のようなメリットがもたらされた。

**◇美唄市のメリット**

①楽譜のアレンジやコラボレーション企画など、年齢層や演奏環境に配慮した演奏を、ハイパー・アマチュアを活用することで、安価に実施することがでできた。

②これまで生演奏の機会が比較的少なかった子どもとお年寄りの年齢層のほぼ全ての施設に、遍く演奏を聴く機会を与えることができた。

◇本学（学生）のメリット

①音楽がもつ様々な可能性を活用した社会貢献の具体的なフィールドを得ることができた。

②異年齢と音楽を通して交流することで、初対面の人とのコミュニケーション力等の社会人基礎力の醸成に役立った。

双方にメリットがあることは、美唄市と本学との連携協定関係にとって極めて重要な点であり、このような互恵関係の上に、ハイパー・アマチュアの活用を念頭に置いた〈新型アウトリーチ〉の実践が展開されたことで、「互恵関係」「ハイパー・アマチュア」という２つのキーワードが、今後のアウトリーチを考える上で、重要であることが示唆された。

（2）ワークショップ型演奏会「美唄サテライト・キャンパス with 札幌国際大学　合同演奏会」：実施後アンケート（聴衆、演奏者）の結果から

①潜在的ニーズの具現化に貢献

美唄市民音楽祭での合同演奏が、市民会館の雪解け水の浸水被害により中止となり、代替案として考えだされたのが、美唄市内の吹奏楽団体による合同演奏会である。この演奏会は、過去２年間にわたって本学が仕掛けてきた、美唄市内の吹奏楽を中心とする音楽愛好家の関係性の構築が基盤となっており、ここに、美唄市の職員との連携があって実現した。

市民同士の繋がりをもった演奏交流は、演奏者だけでなく、聴衆も求めていた潜在的ニーズであることが、アンケート結果（次回もぜひ是非来たい、都合が合えば来たい：99％ n=330）から読み取れる。ただ、この取り組みが平成 26 年度から行われていたにもかかわらず、そのことを知っていたのは、32％に留まっており、このことからも「会場に足を運ばない＝興味がない」というわけではないことが読み取れる。この取り組みは、美唄市の広報紙メロディでも何度も取り上げられてきた。しかし、そのことが周知されていたにもかかわらず、この演奏会のことを知らなかったあるいは、その情報が目に止まらなかったのは、演奏者が自分の関係者でなかったからではないかと推測される。

一方で、ふれあいコンサートの認知度も 30％であることから、演奏者に自分の関係する人がいなくても興味をもっている層がこれくらいの割合でいるとも読み取れる。ただし、このことを確実な結果とするためには、さらに詳細にアンケート結果を読み込む必要がある。

ところで、今回は演奏者についても意識調査を実施している。その結果、94％（n=67）の演奏者が、「次回も是非参加したい、都合が合えば参加したい」と回答しており、演奏者も聴衆と同様に、何らかの意義を感じつつこの演奏会に参加していたことが読み取れる。

一方、参加者ならではの指摘もあった。例えば、演奏会の運営主体がどこなのかが不明確な面があり、演奏者の座席を決めなどの小さなことであっても、誰が決めたらよいかが分からないといった意見や、ワークショップ型と言いながら、楽器別の講師を派遣してくれないといった不満もあった。

この取り組みでは、ワークショップというのは、演奏に至るまでの創り上げる過程を指しており、必ずしも楽器別の講師を派遣することを意味するわけではないが、大学からの働きかけによって、美唄市民がどのような立ち位置で活動に参加すればよいかといった点が、より明確になることが、積極的な市民参加による取り組みの実現のために必要となってくることが考えられる。

②経費負担の意識の啓発

今回の演奏会では、演奏者と聴衆の双方に、このような取り組みでの経費についても質問している。経費負担が増大することについては、アウトリーチの課題としてすでに指摘されている点であり、これについて、〈新型アウトリーチ〉では、ハイパー・アマチュアの活用を提言してきたことから、演奏者と聴衆の意識と実際にかかった経費との間にどのような関係性が見られるかは、大変興味深い点であった。

アンケート調査の結果、演奏者と聴衆共に、奇しくも67％という同じ割合で、総経費が20万円以下であると回答している。また、仮に有料化した場合の、許容される入場料としては、演奏者が、300円までが20％、500円までが51％、1,000円までが11％、聴衆では、300円までが12％、500円までが44％、1,000円までが32％という結果となり、最も多い価格帯は500円であることがわかった。

一方、実際にかかった経費としては、美唄市の持ち出し分の総額の推移をみると、平成26年度が0円、平成27年度が202,264円、平成28年度が215,827円となっており、美唄市だけの持ち出し分でみると、市民の67％予想した「総経費で20万円以下」という予想は、ほぼ適当な額であることがわかる。しかしながら、この経費には、本学から派遣した学生や札響OBの交通費や宿泊費、楽器運搬費や、学生の演奏指導技術向上のための講師謝礼などは含まれていない。大学から支出されたこれらの経費は、平成26年度から平成28年度までの奨励研究の経費（年間80万円）から支出されている。この経費の中には、ふれあいコンサートの実施にかかる経費も含まれており、この全てが合同演奏会にかかった経費ではない。しかし、大学（学生）がこれまでと同様の関わ

り方をするのであれば、経費の不足が予想されることから、今後の運営の在り方を踏まえた、抜本的な経費計画の見直しをする段階にきていると考えられる。

## さいごに

平成 28 年度の報告書では、場と時間の共有体験による価値の創造について触れ、音楽を通した体験は、古来から人々が旅や観光によって得てきた満足感と重なりあう部分があると考えられることを述べた。そして、その満足感は、「生演奏」＝「実体験」に勝るものはないということも指摘した。

本研究は、「演奏者を派遣して終わり」という従来のアウトリーチが抱えていた課題について、ハイパー・アマチュアという存在を活用し、音楽の演奏の楽しさとその周辺での体験をエピソードとしてパッケージングすることで、地域づくりの政策と関連した〈新型アウトリーチ〉としての具体例を模索してきた。その背景には、音楽活動を生涯にわたって愛好できる環境づくりという、「生涯音楽学習」の理念がある。音楽はそれだけでも十分に価値がある活動となるが、それに付随した実体験が、そこにいる人々にとって楽しい、充実したエピソードとなるならば、その価値に対して感謝の気持としての「活きたお金」が動かす仕組みを創ることで、音楽交流によるまちづくりは、継続的な事業展開が可能となるのではないだろうか。

そのような意味で、「満足感」「実体験」「感謝の象徴としてのお金」は、まさに観光産業の要であり、観光学部を有する本学は、音楽交流によるまちづくりに独自のエッセンスを加えられるというアドバンテージを有しているということを、平成 28 年度の報告書でも指摘した。

本研究は本年度（平成 29 年度）をもって 3 カ年の研究を終えたが、アンケート調査や経費負担の分析については、速報値に基づくものであるため、平成 29 年度の美唄サテライト・キャンパス成果発表会へ向けた、詳細な分析と考察が必要である。平成 29 年度に関しては、これまでの取り組みを継続しつつ、美唄市民に手によってこれまでの取り組みを発展させていく準備が整いつつある。例えば、美唄尚栄高等学校の生徒をリーダーに育成し、合同演奏会の運営を担ってもらったり、ふれあいコンサートに本学の学生に加えて市民も参加するなどの具体的な案が、美唄市の担当者からも寄せられている。

ただ、常に留意したいのは、理念さえしっかりしていれば、取り組みの具体的な姿はいくらでも考えられるということである。その理念を支えるのは、地域づくりであれば、上位概念として一づいている、その自治体の政策理念である。音楽のイベントは、その成果が情緒的にのみ語られることがあるが、音楽活動をすることによって、何が、どのように変わるのかを常に意識しながら、今後の研究を進めていく必要があると考えている。

謝辞

本研究に際しては、美唄市の髙橋幹夫氏、美唄サテライト・キャンパス推進室長の谷村泰尚氏、次長の三澤正裕氏、乗田胡桃氏といった関係職員の皆様の多大なるご支援がなければ成立しませんでした。

また、具体的な演奏シーンを考える上で、札幌国際大学シアターオーケストラの長谷川尚輝君、山内朋絵さんのパワフルな活動がなければ、ふれあいコンサートは成立しなかったと言っても過言ではありません。さらに、美唄市内の音楽愛好家の皆さんや小中高等学校の先生方の献身的な連携姿勢も、美唄市ならではの取り組みを支えることとなりました。

また、本研究テーマに特段なるご理解をくださった越塚宗孝学長からは、自治体との連携協力の在り方の基本を一から教えていただきました。本当に皆様ありがとうございました。

さて、本書は、3 年間の奨励研究の報告書の体裁でしかなく、研究論文としてのまとめ方にはなっていません。今後は、この報告書を基に、広く市民の皆様や行政関係者の皆様、音楽愛好家の皆様のお役に立つような論文をまとめ、世に送り出すことが私の使命であり、お世話になった方々への恩返しでもあると思います。

私の生涯のテーマは、「生涯、音楽を愛好できる基盤づくり」です。このことを改めて肝に銘じることとなった美唄市は、奇しくも私の故郷でもあります。音楽と地域づくりというテーマは、古くて新しいテーマです。今後共、本学と美唄市が連携協力関係を維持し、互いがさらに発展することを願いつつ、本報告書を公開します。

河本　洋一（札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科　教授）

# 付録資料

## (1) 取組の様子を見ることができる web サイト

◇美唄市公式ホームページ

http://www.city.bibai.hokkaido.jp/jyumin/docs/2015092900129/

◇美唄サテライト・キャンパス運営協議会

http://www.city.bibai.hokkaido.jp/bsc/14top/15fureai_2/index.html

◇美唄サテライト・キャンパス Facebook ページ

https://www.facebook.com/bsc.bibai

◇市町村の広報紙をネットやスマホで「マイ広報紙」

https://mykoho.jp/article/北海道美唄市

◇YouTube 秋の美唄ふるさとの魅力発見

https://www.youtube.com/watch?v=BWIj1ZZ5aps

◇美唄アルテピアッツア公式ホームページ

http://www.artepiazza.jp/event/artspace/page/2/